Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-05-06

「泣く」 : 複合語を手がかりとしたフレーム意味論的分析

松本, 曜
陳, 奕廷

(Citation)
神戸言語学論叢,11:50-57

(Issue Date)
2018-03-15

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010270

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010270

神戸言語学論叢 第11号
2018年 (平成30年) 3月
50–57頁

Kobe Papers in Linguistics Vol. 11
March 2018
pp. 50–57

「泣く」
—複合語を手がかりとしたフレーム意味論的分析—

松本 曜
国立国語研究所／神戸大学

陳 奕廷
三重大学

1. はじめに[1]

本稿はフレーム意味論（Fillmore 1975, 1982, 1985, Fillmore & Atkins 1992, Fillmore & Baker 2009など）の立場から、日本語の動詞「泣く」の意味記述を行うものである。フレームとは、言語表現に結びついている世界に関する知識の総体であり、Fillmore (1975)により言語学的意味論に導入されたものである。フレーム意味論では、語の意味を事物に関する様々な知識と明確に分けることができないものと考え、そのような百科事典的知識に言及しながら意味記述が行われる。

このフレームは様々な意味現象の説明に用いられてきた。語の意味（個別義）(Fillmore 1975, 1982, Fillmore & Atkins 1992)のほか、多義性（Fillmore & Atkins 2000）、単語間の意味関係（Fillmore 1982, 松本 2010）、動詞項構造構文の意味 (Boas 2003, 2006), メタファーとメトニミー (Koch 1999, Sullivan 2013)、複合語の解釈（Ryder 1994, 陳・松本 2018）などである。本稿は日本語の複合語の解釈に、それを構成する要素に関わる百科事典的知識が関わっていることに着目して、動詞の意味記述を行うものである。

動詞の表す事象には、動詞の項として実現する動作主などのほかに様々な要素が関与する。たとえば、「（太鼓を）打つ」の「打つ」という動詞の表す事象には、動作主や被動作主の他に、道具、手、さらには音などが関与する。さらにはこの行為が行われる目的や結果がある。これらの要素はフレーム要素と呼ばれる。動詞の意味記述においては、何がフレーム要素であり、それについてのどのような情報が含まれるかが重要な課題となる。本稿では、その記述に関して、複合語の考察が有益であることを示す。

なお、本稿の分析結果は概略的に陳・松本 (2018)に示されている。本稿はそこに示された分析の根拠を示すものである。

2. フレームと複合語

動詞を含む複合語にはフレーム要素が深く関わっている。特定の動詞に対して、どのような他の要素が複合に参加するかを調べると、その動詞のフレーム要素にどのような制約があるのかが分かる。

日本語の動詞を含む複合語には、N-V複合語、A(dv)-V複合語、V-V複合語がある（伊藤・杉岡 2002などを参照）。(1)に示すとおりである。

(1) a. N-V複合名詞
　　石投げ　　（移動物）
　　雨漏り　　（移動物）
　　輪切り　　（結果）
　　ペン書き　（道具）
　　昼寝　　（時刻）
　b. A(dv)-V複合名詞
　　薄切り　　（結果）
　　早起き　　（時刻）
　　ただ乗り　（付帯状況）
　c. V-V複合動詞
　　駆け上がる　（様態）
　　投げ上げる　（手段）
　　溺れ死ぬ　　（原因）
　d. V-V複合名詞
　　立ち読み　　（付帯状況）
　　食い逃げ　　（先行事象）

注目すべきは、多くの場合、前項要素が後項の動詞の付加詞的要素である点である(杉岡 1998)。例えば、N-V複合語の場合、「ペン書き」などでは前項が後項の動詞における道具である。ここでどのような道具が複合語前項になるかを見ると、慣習的にどのような道具が書く行為に用いられるかが分かる。「ペン書き」や「鉛筆書き」があっても「消しゴム書き」や「フォーク書き」がないのは、ペンや鉛筆は何かを書くのに使うことができるが、消しゴムやフォークはそのように使えないことによる。また、「昼寝」においては、前項が後項の事象が起こる時刻を表している。「寝る」という行為は通例夜に行われるものであり、昼間に行われることが特別なので、それを表すためにこの語が存在していることになる。

本稿ではこのような複合語を手がかりとして、動詞の意味フレームにどのような情報が含まれているかを考察する。

考察において一つ課題となるのは、どのような場合に複合語が成立し、どのような場合に成立しないのかである。たとえば、「昼寝」はあるが「夜寝」が存在しないのは、それが表すことになる事象が「普通の」出来事であり、特に語彙化する必要が無いと思われるからである。その一方で、指示対象となるような出来事が起こることが稀なので、語彙化

する必要が無いという場合もある。たとえば、「ナイフ書き」などがそうである。このように、ある複合語がないという事実だけからは、それが表す事象がどのような性質のものかを機械的に判断することはできない。本稿では、複合語の存在、非存在がどうして生じているのか、二つの可能性があることを踏まえた上で、考察を進める。

3. 「泣く」に関する先行研究

本稿が取り上げる「泣く」に関しては、意味論的な研究がほとんど存在しない。宮島達夫、柴田武、国広哲弥、森田良行らの著作にも、この動詞の分析は示されていない。ある程度参考になるのは辞書類であるが、以下のような定義がほとんどである。

(2) a. 人が、精神や肉体への刺激にたえかねて、声を出し、また涙を流す。（『日本国語大辞典』）

b. 悲しみ・苦しみ・喜びや痛さなどをおさえることができず、声をあげたり、涙を出したりする。(『デジタル大辞泉』)

c. 人が、悲しみ・苦しみなどのために声を出し、涙を流す。また、喜びなどで涙を 流す場合にもいう。(『大辞林第3版』)

これらの三つに共通しているのは、理由と行動の二つを示している点である。理由としては二つの辞書が悲しみと苦しみを最初に挙げていて、これが典型的であることを表そうとしていると思われる。『日本国語大辞典』の「精神や肉体への刺激」というのは一般的過ぎるきらいがある。また、二つの辞書の記述に＜耐えられない＞ことへの言及がある。また三つの辞書とも＜声を出す＞ことと＜涙を出す＞ことを並列的に挙げている。この点は疑問がある。「泣く」において中心的なのは＜涙を出す＞ことであり、＜声を出す＞ことは副次的である（必須ではない）と思われる。

4. 複合語の解釈に基づく「泣く」の分析

「泣く」を含む複合語から、「泣く」が表す事象について考察すると以下のようになる。まず、(3)は泣く行為者に関わる複合名詞である。

(3) 泣き虫、男泣き

「泣き虫」は常習的に泣く人を表し、泣く行為を行う頻度に個人差があることを示している。またこの語には否定的なニュアンスがあり、特に大人について使われる場合にそうである。また、「男泣き」が存在しているが、「女泣き」が普通使われないのは興味深い。

これは、泣くことの社会的意味が男女で異なることを示している。一般に大人が泣くことは心の弱さの表れだと解釈され、特に男性が人前で泣くことは男らしくないことだと見なされる傾向がある。このような事情を背景として、男が泣くことに特別な意味があるからこそ、「男泣き」が成立していると思われる。

そのほか、泣くことがどのような身体的変化あるいは行動を伴うかを示す複合名詞もある。

(4) a. 泣き顔、泣きっ面、泣きべそ
　 b. 泣き声

(4a)から分かるように、泣く結果が顕著に表れるのは顔である。また、(4b)から分かるように、泣くことは独特な声を伴う。「えんえん」「ぎゃーぎゃー」「しくしく」などは泣き声専用のオノマトペである。

泣くことがどのような理由によって起こるかを示す複合名詞や複合動詞もある。(5)がそうである。

(5) a. うれし泣き、悔し泣き、もらい泣き
　 b. 嘘泣き、作り泣き、泣きまね

(5a)は、泣く理由として、うれしい、悔しいという感情があることを示す。「悲し泣き」がないのは、悲しいことが泣くことのデフォルト的理由であり、悲しくて泣くことを特に語彙化する必要がないからと思われる。また、「もらい泣き」は、泣くことが「感染」する現象であることを示している。また(5b)は、時として泣くことが欺瞞的行為であることを示している。「泣きまね」が表す典型的な行為は、涙を流すことのほか、泣き声を出すこと、手で涙を拭く（ふりをする）ことである。

泣き方を示す複合名詞もある。

(6) 忍び泣き、狂い泣き、むせび泣き、すすり泣き

「忍び泣き」は、人前で泣くことに抵抗感が伴う場合があることを示している。「狂い泣き」は、しばしば泣くことには我を忘れたような行為が伴う場合があることを示している。「むせび泣き」「すすり泣き」は、泣く際に喉を詰まらせたり、鼻からの液体の分泌が伴ったりすることを示している。

(7)の複合動詞は、「泣く」と共起する事象を含んでいる。

(7) a. 泣き叫ぶ、泣きわめく
　　b. 泣きすがる

(7a)は泣くことが大きな声の発生を伴う場合があることを示している。また、(7b)は一緒にいる人にしがみつく場合があることを示している。
　泣くことの結果。影響を示す複合動詞もある。

(8) （目を）泣き腫らす、（顔、頬が）泣き濡れる

これらも、泣くことによって目と顔がどのように変化するかを物語っている。
　また、(9)は泣くことによる身体全体の変化を示している。

(9) 泣き崩れる、泣き疲れる

激しく泣くと立っていられなり、長く泣くと体力・精神力の消耗が生じるのである。
　さらに、泣くことはそれを見る人に大きな影響を及ぼす。(10)は泣くことによって、特定の人にお願いをしたり、要求を受け入れてもらうことができることを物語っている。

(10) 泣きつく、泣きすがる、（人を）泣き落とす

　また、(11)は泣き悲しむ状態が夜通し続いたり、さらに長い期間続いたりすることに基づいている。

(11) 泣き明かす、泣き暮らす

　最後に、(12)は「泣く」が「笑う」と対比的であることを示している。

(12) 泣き笑い

　以上の考察から、「泣く」の意味を以下のようにまとめることができる。ここでは、陳・松本 (2018) で用いた語彙的意味フレームの表示方法にほぼ従う形で示す。なお、事象参与者のうち、【】内は中心的な要素であり、〖〗は周縁的な要素である。項として実現するものは太字で示しその文法機能も表示している。

表1　「泣く」の語彙的意味フレーム

中心的事象		【泣く人】(Subj) が【目】から【涙】を出す
事象参加者	【泣く人】	泣く行為者
	【目】	【泣く人】の身体部位で【涙】が出る場所。
	【涙】	【目】から出る液体。
	【顔】	【泣く人】の身体部位で【目】【頬】【鼻】【口】などを含む。
	【泣き声】	【泣く人】が泣く際に、しばしば【口】から発せられる音。「えんえん」「ギャーギャー」などの音で表される。
	【一緒にいる人】	【泣く人】が泣くのを見たり聞いたりする人
	【場所】	泣く行為が行われる空間的地点。隠れたところ、あるいは特定、不特定の【一緒にいる人】の前。
	【期間】	泣く行為の始まりから終わりまで。しばしば、夜通し行われる。また、かなり長い期間にわたって断続的に続く場合もある。
関連事象	理由	典型的には深い悲しみのために行われる。悔しさ、うれしさのために、または他の人が泣いていることに誘われて行われることもある。
	目的	何かを訴えたり、同情を引こうとするなどの目的を持って行われることもあり、時にはわざと泣いたふりをすることもある。
	様態	しばしば人目を忍んで静かに行われる。あるいは、体を震わせたりして激しく行われ、暴れる場合もある。
	結果・影響	【顔】の様相が変わる。特に、【涙】が【顔】の表面を流れて【頬】などが濡れたり、【目】が腫れたりする。また、しばしば【泣く人】が立っていられないほどになり、また体力・精神力が消耗することがある。また、【一緒にいる人】が影響を受けて、同情を寄せたり、言うことを聞いてくれたり、一緒に泣いたりすることがある。
	付帯事象	しばしば、【泣き声】（えんえん、など）を出したり、叫んだり、喘いだり、【鼻】をすするなどの行為を伴う。また、【涙】を【手】で拭いたりする。また、【一緒にいる人】にしがみついたりする場合もある。
	背景	泣くことは感情を制御しきれないことによる。そのため泣くことは心が弱い結果、あるいは感情の制御力の欠如の結果だと見なされ、大人、特に男性は人前で行うことはふさわしくないとされる。
	同位・上位事象	喜びの表出である笑いと同位的（対比的）。

注意すべきことは、これらのことは、あくまで「泣く」という言語表現と結びついた事象に関する知識だという点である。英語のcry, weep, sobにおいては声の発生やむせびの有無などによる使い分けがなされており、当然ながら意味記述の内容が異なってくる。個別言語は涙を流す行為を異なる形で語彙化しているのである。

5. 分析方法に関する考察

本稿で試みた分析方法に関する一つの課題は、複合語のみを手がかりにして十分なフレーム情報を得られるのかどうかである。それぞれのタイプの複合語には、それぞれの形態論的、意味的な制約がある（複合動詞に関しては陳・松本 (2018)を参照）。例えば複合動詞の場合、前項動詞は和語の単純動詞でなければならない。そのため、感動したり、感極まって泣くことはしばしばあるが、「感動し泣く」「感極まり泣く」は形態論的に存在できない。また、意味的な理由で存在が妨げられていると思われる例もある。英語ではcry one's trouble awayという表現が可能であるが、これは泣くことによって心が晴れ、悩みなどを忘れることがあることに基づいている。しかし、同様の背景に基づいて「泣き忘れる」を用いることはできない。「泣く」がテ形なら問題ない。

(13) １ヶ月前に元彼とヨリ戻したらしく、その失恋した日は思い切り泣いて忘れようとしたんですが、今でも忘れることができません。（BCCWJ Yahoo!知恵袋/）

「～忘れる」は「寝忘れる（寝ることによって忘れる）」なども不可である。一般に心理動詞は原因型の複合動詞後項にならない。これは、この型の複合動詞に課せられた意味的制約を反映していると思われる（陳・松本 2018参照）。（「～忘れる」が統語的複合動詞として存在していることと関係があるかも知れないが、それを支持する根拠は今のところ見いだせない。）

このような制約があることを考えるなら、語彙化されていなくても重要なフレーム情報が存在することになる。

6. 結語

以上、複合語を手がかりに動詞の語彙的意味フレームを分析する方法について考察した。

註

[1] 本稿は、陳・松本（2018）の執筆改訂作業を通して生まれたものであり、国立国語研究所研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」の動詞の意味構造班（リーダー：松本 曜）の研究発表会（2017年10月14日、名古屋大学）で発表されたものである。

参考文献

Boas, Hans C. 2003. *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford, CA: CSLI Publications.

Boas, Hans C. 2006. A frame-semantic approach to identifying syntactically relevant elements of meaning. Hans C. Boas (ed.) *Contrastive Studies and Valency: Studies in Honor of Hans Ulrich Boas*, 119-149.

Fillmore, Charles, J. 1975 An alternative to checklist theories of meaning. In *Papers from the first meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 123-31. Berkeley, CA: Berkeley Linguistics Society.

Fillmore, Charles, J. 1982. Frame semantics. In The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin Publishing.

Fillmore, Charles J. 1985. Frames and the semantics of understanding. *Quaderni di Semantica* 11: 222-254.

Fillmore, Charles J., and Beryl T. Atkins. 1992. Towards a Frame-based organization of the lexicon: the semantics of RISK and its neighbors. In Adrienne Lehrer and Eva Kittay (eds.) *Frames, Fields, and Contrasts: New Essays in Semantics and Lexical Organization*, 75-102. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.

Fillmore, Charles J., and Beryl T. Atkins. 2000 Describing polysemy: The case of 'crawl.' In Y. Ravin, and C. Laecock (eds.), *Polysemy*, 91-110. Oxford: Oxford University Press.

Fillmore, Charles J., and Collin Baker. 2009. A frames approach to semantic analysis. In Bernd Heine and Heiko Narrog (eds.) *The Oxford Handbook of Linguistic Analysis,* 313-339. Oxford: Oxford University Press.

Koch, Peter. 1999. Frame and contiguity: On the cognitive bases of metonymy and certain types of word formation. In Klaus Uwe Panther and Günter Radden (eds.), *Metonymy in Language and Thought.* 139-167. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

Ryder, Mary Ellen. 1994. *Ordered Chaos*: *The Interpretation of English Noun-Noun Compounds*. Berkeley, CA: University of California Press.

Sullivan, Karen. 2013. *Frames and Constructions in Metaphoric Language*. Amsterdam: John Benjamins Publishing.

伊藤たかね・杉岡洋子. 2002. 『語の仕組みと語形成』 東京：研究社.

杉岡洋子. 1998.「動詞の意味構造と付加詞表現の投射」『COE 形成基礎研究費研究報告: 先端的言語理論の構築とその多角的な実証 (2) 』 341-363.

松本 曜. 2010.「英語反義語における「反義語らしさ」の決定要因」 岸本秀樹（編）『ことばの対照』 95-107. 東京：くろしお出版

陳 奕廷・松本 曜. 2018. 『日本語語彙的複合動詞の意味と体系ーコンストラクション形態論とフレーム意味論ー』 東京：ひつじ書房